

月刊みんぱく 12月号

2024



特集

ペーパーレス時代の紙

巻頭エッセイ 伊藤 亜和

「呪い」と誰かが口にするのを、 今日も耳にする。

伊藤 亜和
文筆家

プロフィール

1996年横浜市生まれ。学習院大学文学部フランス語圏文化学科卒業。noteに掲載したエッセイ「パピと私」が「創作大賞2023」のメディアワークス文庫賞を受賞。各種連載で執筆多数。物事を独自の視点で表現している。「存在の耐えられない愛おしさ」(KADOKAWA)が好評発売中。

数

年前のあるドラマに「自分に呪いをかけないで」という台詞があった。たしか当時流行っていたドラマの最終回で、ネット上には瞬く間にそのシーンの切り抜き動画が溢れかえった。決してそんなことはないのだろうけれど、私には、世間の人々がその目を境に突然「呪い」という言葉を使いはじめたように思えてならない。あたかもずっと前からそんなふうにして使われていたかのような自然さで、今までホラー映画やファンタジーの世界だけに潜んでいた「呪い」は日常に踏み入ってきたような気がする。

自分を縛る「社会常識」とされているものや、自分の自分への思い込みに「呪い」という呼び名が与えられ、私たちは自分を苦しめる正体不明のあらゆるものに「それは呪いだ」と指を指していった。私は、なんだかあらゆる痛みにも当たる魔法を習得したような気分になった。この安心感は一体なんなのだろう。呪いを解くためには、まず自らが呪われていると自覚をして、それからそれに適した対処をしなければならぬ。王子様のキスで目覚めるためには、まず深い眠りに落ちる必要があるように、呪いを解

くためには、まず呪いがそこに在らねばならない。

「呪われる」のには不思議な中毒性がある。名前のないモヤのような不運を「呪い」と呼んだ途端、それは妙に心地よい質量をもって私たちの身体に覆いかぶさってくる。そしてそれはなぜか分厚い毛布のようにあたたかく、私はいつのまにか、自分がすでに呪われたがっていることに気がついた。呪いをもたないということは、自分の選択の結果を誰のせいにもせず、生きている責任を一身に背負うということなのかもしれない。いちど呪われてしまった私たちにとって、それは途方もなく心細い。呪われてさえいれば、ひどく傷つくこともないし、呪われることに呪われてしまえば、暖かい繭のなかで、ゆっくりと死んでいくだけである。

私は今、呪われない勇気がほしい。柔らかい身体のまま繭の外へ這いずり出て、容赦なく雨風に晒される決心がほしい。「呪い」という言葉が魔法の世界にしかなかったあの頃と変わらない自分で、たしかにかけられている呪いの名前を知らないまま、無邪気にそれと戦って生きていたいと願う。不幸のすべてに理由をつけないほうが、倒れてもまた立ち上がって歩いていける、そんな気がするのだ。

月刊
みんぱく
2024年12月号

表紙

馬瑞蘭さんがかつての家族団楽の食事風景を描いた剪纸作品(中国 陕西省 陕北地域、2018年、丹羽朋子撮影)

*本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

- 1 巻頭エッセイ
「呪い」と誰かが口にするのを、
今日も耳にする。
伊藤 亜和
特集 ペーパーレス時代の紙
- 2 環境配慮時代の素材
安藤 悠太
- 4 切り紙(ふる)
丹羽 朋子
- 6 牛牧民ヌエルにとっての紙きれ一枚
橋本 栄莉
- 8 カミノチカラ
小林 泰三
- 10 記録媒体の王者
永井 正勝
- 12 みんぱく回覧板

- 14 推しコレ図鑑
維摩が洞窟からやってきた!
末森 薫
- 16 もっと、みんぱく
南アジア展示場のまぼろしのスパイス
松尾 瑞穂
- 17 世界の「乗っちゃえ!」
中国、変わりゆく村の電気三輪車
川瀬 由高
- 18 特別インタビュー
この瞬間に同じリズム、
同じビートを共有する
ダースレイダー
- 20 ぼくっ!とフィルめし
今の推しはツァハラジン
久岡 加枝
- 21 今月号の地図・編集後記



左：卵パックは日本ではPET製が主流だが、ヨーロッパではパルプモールド製が多い(フランス パリ、2022年)

下：食品のテイクアウト容器はヨーロッパでは今や紙製が主流。日本でも増えてきた(京都府、2024年)



gresei/Shutterstock.com

特集 ペーパーレス時代の紙

近代以降の政治、外交、経済、宗教、科学、芸術、教育……

みんな、大量の紙と印刷技術あってこそだった。

ついに昨今、エコの観点からペーパーレス化で文書は電子化。

いっぽう、これまたエコの観点からプラスチックをやめて、紙！

紙は何度でも生き返る。



環境配慮時代の素材

脱プラスチック

紙ストローは好きだろうか？ 最近、使い捨てプラスチック製品削減のために、多くの飲食店でプラスチック製ストローから紙製へと置き換えが進んでいる。一方で、口触りが悪い、すぐふやけるなど、不満の声も根強い。他にも、レジ袋有料化に伴い紙袋に切り替えたり、お菓子やホテルアメニティの外装や食品テイクアウト容器が紙製になったりするなど、紙がプラスチック代替のひとつの選択肢となっている。

そもそも、紙は、植物などから取り出した繊維を成形したものである。その歴史は長く、中国で二千年以上前に生み出されたといわれている。現代では紙は大量生産可能で、木材などからセルロース繊維を中心に取り出したパルプから作られる。日本は世界有数の紙生産国であり、一人当たり消

費量も他国に比べて多い。ペーパーレス化による減少の傍ら、段ボールや紙おむつなどの生産は増加しているようだ。容器包装や衛生用品としての需要は元々高い中、さらにプラスチック代替という役割が加わっていく未来は想像に難くない。

紙のサステナビリティ

環境配慮の観点から紙がプラスチックよりも有利な点は、おもな原料である木材が、再生可能資源であり、カーボンニュートラルであり、生分解性を有すること、と整理できる。ただし、パルプ製造の際に水使用量が多いことや、プラスチックに比べて重くなり輸送時のエネルギー消費が増えることなどから、環境負荷の議論には個別の計算が欠かせない。

また、原料である木材を適切に調達していなければ、森林破壊につながる。適切な

森林管理と加工・流通を認証された製品を示すFSCラベルが付いているものや、竹やバガス(サトウキビの絞りかす)などが原料のものを選ぶことも重要だ。加えて、古紙利用は資源循環の観点から優秀であり、特に日本の古紙リサイクルシステムは世界随一とされる。牛乳パックのような内側に薄くプラスチックが塗布されたものでも、三割以上がリサイクルに回されている。

新しい紙のかたち

紙がプラスチックを代替する際には、丈夫さと耐水・耐油性の担保の他に、厚みのある立体的な形を作るのが難しいという課題がある。そこで期待で

きるのが、パルプモールドだ。水に溶かした紙繊維を金網で漉き上げ乾燥させて作るため、従来の紙製品よりも複雑な立体成型が可能となえ、古紙も原料として利用できる。もっとも身近なパルプモールドは卵パックだ。家電などの発泡スチロール製緩衝材の代替のほか



紙の質感を活かした高級感のあるスマートフォンのパッケージ。複雑な三次元形状に成型できるのがパルプモールドの強み(日本モールド工業株式会社提供)



ヨーロッパでは環境配慮型歯ブラシが売られ、その一角は紙包装が多くエコな雰囲気が漂う(ブルガリア ソフィア、2022年)

右上：環境配慮のために増えている紙ストローに対して、ユーザーの評価は分かれている(京都府、2024年)

右下：ホテルの木製歯ブラシ。木・竹製のホテルアメニティの袋は紙製であることが多い(インド チェンナイ、2023年)



右頁：「南三陸311メモリアル」で開催された「南三陸みんなのきりこ展」の展示。右上は豊楽食堂で鉄板で焼きそばを焼いていた遠藤さんの記憶を映した形（宮城県 南三陸町、2024年）



左：馬瑞蘭さん作の「寒衣」。ミニチュアサイズで、剪紙が装飾に使われている。紙靴は菓子のパッケージなどを流用して作られる一方、寝具は綿が詰められるなど細かな細工もされている（中国 陝北地域、2012年）
右：中国陝北の病送りの儀礼で用いられる「丹青」（中国 陝北地域、2008年）



は溶ける。だからこそ切り出された紙の形は古来より、わたしたちの願いや、逆に災いまでも、神々や死者が住まう他なる世界に転移させてきた。日本各地では「流し雛」や「形代」といった、人形に切り抜いた紙に、人間の穢れや厄を移して川や海に流す風習が知られる。

わたしの調査地である中国陝北地域でも、病送りの儀礼の際、家族や巫師によって五色の人形の切り紙「丹青」が作られ、患部をそれで撫でた後に村内の辻で燃やされる。



切り紙〈ふる〉

丹羽 朋子

国際ファッション専門職大学 准教授

三陸沿岸地域で正月を飾るキリコ

「〈ふる〉（振／震る）ことで、見えないものの依代となる」

宮城県南三陸町にある上山八幡宮の工藤真弓さんによれば、風に揺れる「キリコ」が神の気配を知らせるのだという。彼女も作り手であるキリコは三陸沿岸の神社で氏子に頒布される正月飾りで、平面的な「切り透かし」型と立体的な「恵比寿の幣」の二種類がある。大漁祈願には網にタイ、モチ、神酒、扇子などの形が、山間部の神社のキリコだと五穀豊穡を祈って牛馬や米俵などの形が切り出される。キリコには、現物を供えられない苦難のときも、神聖な紙に豊かさを施し乗り越えてきた、古の人びとの祈りが込められていると工藤さんは語る。

「囲炉裏があつたころはキリコは煤けて真っ黒。今も一年経てば湿気やたばこの煙で黄



上：上山八幡宮の切り透かし形式のキリコ
下：上山八幡宮で「恵比寿の幣」（鯛飾り）を作る工藤庄悦司（どちらも宮城県 南三陸町、2012年）

ばんで別物」と住民は語る。あらたな年のはじめに、真っ白で美しい形のキリコが飾られることで、神棚は清々しさを取り戻す。

一方、古いキリコは神社に戻され、小正月前夜のどんと祭の御神火で焼かれて消え失せる。人びとはその煙にあたり、今年一年の無病息災を祈願する。儚い紙だからこそ、年ごとにあらたな形として再生されるのである。

形は作り手のなかにある

東日本大震災の津波被害を受けた神社では、神職から「恵比寿の幣は初めから型紙がなく、形は自分のなかにあるので困らなかった」とも聞いた。作り手の手のなかに形が刻み込まれているから、災禍にあつてもキリコは早々に復活し、生き存えることができた。

紙はすぐに破れる。火には燃える。水に

ご先祖の冬支度用に作られる紙製の「寒衣」もまた、墓前で燃やされてあの世へと送られる。紙の形は今この場所から消失すること、彼方の世界と人びとをつなぐのである。

儚い紙ゆえの永さ

消失と再生をくり返す伝承切り紙は、作り手が折々にアレンジを加えて、記憶の表現媒体ともなる。たとえば陝北の寒衣作りの名手でもある馬瑞蘭さんは、若くして亡くした夫や息子を想い、かつて自らの手のなかにあつた家族団欒の風景、その在りし日のイメージを絵日記のように紙の形を切り出す（表紙写真）。紙だから永くはもたない。

だからこそくり返し作られる彼女の剪紙には、同じモチーフでも、自分や社会の現状が投影され、切るたびにあらたな形があらわれる。それと通じる切り紙の形に、今夏訪れた南三陸町の震災伝承施設で出会った。ボランティアの人たちが住民の震災前や後の経験を聞き取り、神社のキリコの様式を模して切り紙にあらわす「南三陸みんなのきりこプロジェクト」。失われた街の風景や過ぎ去った思い出をひとときだけのせてゆらゆらと〈ふる〉切り紙。儚く消えるからこそ人びとの手でくり返し作られ、想いや記憶を「再生」させる。そこに紙の形の生命力を感じた。

牛牧民ヌエルにとっての紙きれ一枚

はしもと えり
橋本 栄莉 立教大学 准教授

紙は弱い

「ねえ、なんでそんなにペラペラの『紙切れ』が大事なの？」

二〇一〇年代、南スーダンの村落部に暮らす牛牧民、ヌエルの人びとは、婚姻届によって結婚が成立してしまうわたしたちの「紙」文化を笑った。人間の出生から結婚、死亡までを文書で管理・把握され、国家の行く末を投票用紙で決定し、わたしたちの人生の多くの悩みも紙幣にまつわるものばかり。「自身の代理」でもあるハンコを紙切れに押したこと、どれだけの人びとが人生を破滅させてきたことか。

ヌエルの人びと曰く、「紙は弱い」。水にぬればすぐに破れてしまうし、シロアリやヤギが食べてしまう。たしかに、紙は物質的には最弱なもののひとつかもしれない。しかし、わたしたちの社会が紙に与えている価値は最強だ。改めて考えてみると、彼



今なお牛とともにあるヌエルの村落部の暮らし(南スーダン ナーシル郡、2010年)

らが抱く疑問ももつともである。なぜわたしたちは、こんなにも「弱い」ものに人生を振り回されているのだろう。

牛は最強

ヌエル社会で最強の交換媒体は、牛である。牛は祖先から受け継がれ、幼いころからとも歩んできた自己の分身ともいえる存在だ。牛は単なる食糧などではない。交換することとで友情を育んだり、婚資として花嫁側に贈ることで、多くの妻を得たりすることができる。他人を傷つけてしまったときには賠償になるし、神々に捧げることとで共同体や個人の人生の安寧を祈ることもできる。人間のように血肉をもち、次から次へと子どもを産む、まさに「生きた貯蓄」(livestock／家畜)である牛はとも「強い」——はずだった。

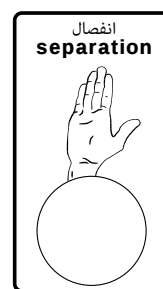


隣国のウガンダで避難生活を送るヌエルの難民自助組織における役割を示す「証明書」(ウガンダ キリヤドゴ難民居住区、2018年)

しかしイギリスによる植民地支配期以降、ヌエルの人びとは文書の圧倒的な政治・軍事的力を目の当たりにした。自分たちの名前や、「税」として政府に納めなければならぬ牛の頭数が紙に記入され、牛の管理から土地の立ち退きまでを行政文書は可能にした。行政文書のみならず、紙幣(＝経済)やノート(＝教育)、聖書(＝宗教)や処方箋(＝医療)として、紙・文書とそれらを取り扱う力は彼らの人生を左右させた。このような紙の驚くべき力ゆえに、ヌエルの人びとはいつしか紙を、「神」に近いカテゴリーとして区分するようになった。

一〇〇年前の予言

長年にわたる内戦の末、二〇一一年、南スーダンにはスーダンから独立した。分離独立を決定づけたのもまた、投票用紙という紙であった。識字率の低い南スーダンでは、投票用紙には文字ではなく、分離独立か、統合かの選択肢がイラストで示された。ヌエルの人びとは投票用紙を見て驚いた。分離独立を示す「片手」のイラストは、一〇〇年以上前に存在したヌエル出身の予言者ングデン・ボンによって予言されていたものだったからだ。



2011年の南部スーダン住民投票で使用された投票用紙(イメージ)。丸枠に拇印を押して投票する
出典: 橋本栄莉著『エ・クウォス——南スーダン・ヌエル社会における予言と受難の民族誌』(九州大学出版会) 278頁を元に編集部にてイメージ作成

右: 投票日までの日数をカウントダウンする看板。中央にあるのは分離独立を示す「片手」のイラスト(南スーダン 首都ジュバ、2011年)

ングデン・ボンは、生前はその奇妙な言動から「狂人」として人びとに見なされていた。死後になって、彼が残した歌や言動は、キリスト教の到来や内戦、そしてノートやそこに書かれた文字など「紙」を重視する近代教育の到来を予言していたと言われるようになる。そして今では、ヌエルを越えて多くの民族集団のあいだで知られるようになった。彼の予言的言動のひとつに、「苦難の後、一本の手が人びとを救う」というものがある。このエピソードを思い起こしたヌエルの人びとは、用紙の背後に「神の意志」を感じとり、投票所へと向かった。現在、ヌエルの人びとは自分たちの「憲法」や、民族における役割を示す「証明書」を発行し、紙の神的能力を借りながら、共同体や自己の価値をコントロールすることに精を出している。

ヌエルの人びともはや、わたしたちを笑うことはできない。絶対に牛であるべきとされてきた婚資も、内戦による牛の激減のために、徐々に紙幣にとって代わられた。ともに「弱い」はずの紙の不可思議で神的能力に人生を翻弄される、同時代を生きる仲間なのだ。安定した電気の供給がない、つまり誰でもどこでも充電できる環境がないヌエル社会で、ペーパーレス化の動きはまだまだ先になるだろうけれど。



カミノチカラ

小林 泰三

株式会社小林工房代表

神の力

島根県の石見地域に残る民俗芸能「石見神楽」。

この芸能で使われる神楽面は、全国的にもめずらしい和紙面である。

もともと「石見神楽」は、江戸時代まで神職によって執りおこなわれており、その時代はすべて木彫りの面を使用していた。しかし、明治に入り神職の演舞が禁止されたことを受け、氏子の手になられた石見の神楽舞は、テンポの速い囃子と舞に変わっていく。

それにより、従来の木彫り面に代わる軽量なものが求められ、和紙製の軽い面が考案されたのである。

その技法は、まず粘土によって型を塑像し、乾燥して固まったその原型に、柿渋入りの糊を浸透させた石州和紙を貼り重ねていく。

和紙を細かく手

で千切り、引き伸ばしながら貼り重ねるこの「和紙貼

り」という作業を五〜六回繰り返して、約一〇日間かけて五ミリメートル程度の厚みまで貼り重ねる。

そして、原型の粘土型を裏面から木槌で打ち壊すことで、和紙だけの素地を生み出す。奈良時代の塑像技法である「脱活乾漆」に類似していることから、この作業は「脱活」とよばれている。和紙のみとなった面に、日本古来の顔料である胡粉を塗り重ね、口や目などの彩色を施し、種類によっては馬の毛などを植えて完成となる。

神の地から

石見の和紙面の最大の特徴は、この脱活技法にある。

を表現している。

襖ほどの大きさの作品でも、指一本で持てる重さなので、壁や天井に負担がかかることがない。また、和紙は貼り重ねることで頑丈になるため、壁面の接続部分で接着剤を使うことなく、和紙のみで作品を安定、固定することができるのである。

軽さと頑丈さ、貼り重ねの美しさが最大の魅力といえるだろう。

石見神楽の舞台でしか用いられなかった和紙の面が、今、インテリア装飾として人びとの生活空間に溶け込み、多くの方々の目に触れられている。それは、先人の工夫と努力あつてのことと、日々、感謝と尊敬の念を忘れないようにしている。一枚の薄い紙から、あらゆる造形物を生み出すことができるこの技法と素材を、次の世代にしっかりと伝えつなげていきたい。



上：粘土型を自然乾燥させ、「和紙貼り」をおこなう
下：裏側から粘土型を打ち砕く「脱活」
(どちらも島根県 大田市、2009年)



石見神楽面。土と和紙、そして高い技術と知識をもった職人たちにより「和紙面」が生み出され、石見神楽の発展に大きな影響を与えた(島根県 大田市、2024年)



和紙製のお面といえば、兵庫県の「姫路張り子面」や、京都府の「嵯峨面」が有名だ。福島県や岩手県にも和紙製のお面が残っている。その技法は、木型や石膏型を土台として、型から抜き取る「張り抜き」という技法である。石見には、この張り抜き製の神楽面も一部地域で残っていた。

島根県西部に分布する都野津層という地層から、瓦や水瓶に適した良質の粘土が豊富に採取できたことに加え、その粘土を材料として土人形を制作する「土人形師」が、江戸時代から多く存在していた。この良質で豊富な粘土と土人形師によって、石見神楽の和紙面はより精巧な脱活技法の技術で発展していった。

左頁：小林泰三 壁画レリーフ《八岐大蛇》
日本神話の世界を表現した「和紙レリーフ」作品。迫力ある造形と貼り重ねた石州和紙の美しい風合いが魅力



パピルス草(エジプト ルクソール西岸、2004年)

記録媒体の王者

ながい まさかつ
永井 正勝

民博 特任教授



古代エジプトの「死者の書」

ネネト・コンスウという女性に捧げられた死者の書で、呪文の第26章ならびに第30章が筆書きヒエログリフで書かれている
(エジプト、国立民族学博物館蔵H0183879)

をからめ、薄く膠着^{こうちやく}させたものと定義される。パピルス紙には漉く工程がないため、残念ながら「紙」には当てはまらない。

実現しないペーパーレス社会

漉く工程をとまなう紙の技法は中国で発明された。目下のところ、最古の紙は紀元前一五〇年ころのものだとされている。紙は、長い歴史を経て世界各地に伝わり、現在では、もつとも簡易な記録媒体として日常的に使用されている。

ところが、記録媒体の王者としての紙の地位を脅かすものとして、電子媒体が急速に発達した。今や、デジタルで書かれる文

書の量は、手書きで紙に書かれる文書の量をはるかに凌駕^{りやう}している。このようなデジタル化の流れから、近い将来、ペーパーレス社会がやってくるといわれていた。ところが、それは絵に描いた餅のようなもので、いっそうに実現していない。その理由は、機動性と表示性など、紙には電子媒体にはない利便性があるからだろう。

紙に書くのは書記、石には彫刻家

おもえば、近代官僚制による事務管理は紙と印刷技術に支えられてきた。そして、東アジアの場合、紙にお墨付きを与えるのが印鑑である。電子ファイルで了承を得ているというのに、^{なづいん}原本(＝電子ファイルを紙に出力し、署名・捺印したもの)の郵送が求められる、ということを経験している人も多いことだろう。

古代エジプトの官僚制でも書記が重要な地位を占めていた。永続性という点からいえば、石材に文字を彫り込む方が効果的なのだが、石材にヒエログリフを彫るのは、書記ではなく、彫刻家の仕事であった。そこである書記は「パピルスの巻物は、文字の刻まれた石碑よりも、有益である」と述べ、書記の社会的な地位の高さを称えていた。

パピルス紙は紙なのか？

海外のとある博物館のリーディンググループで待っていると、申請していた古代エジプトのパピルス写本が運ばれてきた。ワクワクしつつ、そこに書かれたヒエラティック(神官文字)の筆跡を凝視する。文字は、堂々と迷いなく書かれている一方で、水で消して修正した箇所や、かすれた部分があることがはつきりと見てとれる。インクのかすれは、書字材料であるパピルス紙の制作技法に関係している。

パピルス紙とは、パピルス草を薄くはいで短冊状にしたものを縦横に組み合わせ、上から叩いてシートにしたものだ。それゆえ、パピルス紙を観察すると、まっすぐ走る繊維の長い線が見える。パピルス写本の文字のかすれは、繊維の線が筆の邪魔をして生じたものだ。

さて、この薄いシートとしてのパピルス紙。それを指すラテン語の papyrus が英語の paper「紙」の語源になったという。なんとも壮大な歴史を感じる話である。しかしながら、じつのところ、パピルス紙は「紙」ではない。「紙」とは、植物の繊維を細かく粉碎し、水に溶かし、漉いて繊維どうし



左頁：紙を漉すための簀桁(すけた)と舟
(高知県、2007年、和紙スタジオかみこや提供)

紙というのは、簡易な書字材料としての個人的な使用ばかりでなく、社会のあり方と結びついて存続しているようだ。

本の紹介

小野林太郎 編
『島世界の葬墓制』
——琉球・海域アジア・オセアニア』
雄山閣 9,900円(税込)
人類が生きていく上で、死者を弔うという行為を避けることはできません。本書は海域アジア・オセアニア・琉球列島の島世界における葬墓制をテーマに、考古学・人類学・民族学や民俗学における最新の成果より論じる野心作です。

川瀬慈 著
エチオジャズへの蛇行
音楽之友社 2,970円(税込)
エチオジャズ!? それは、エチオピア音楽を震源とする世界の交響。20年以上エチオピアに通う映像人類学者が、自身の追憶、音楽家との交流を軸に、写真、音源紹介を含めて魅惑の音楽世界を案内します。

みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)
参加無料

第552回 12月21日(土)
13時30分～15時(12時30分開場)
地域社会で生きること
——グローバル化のなかのイタリアの人びとの暮らしから
講師 宇田川妙子(本館 教授)
【申込期間】
▶一般受付 12月18日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。
※事前申込制、先着順(定員320名)
※当日参加申込も可能。当日12時30分より受付・開場します。(定員80名)

第553回 2025年1月18日(土)
13時30分～15時(13時開場)
ヨーロッパの多神教世界
——魔女、女神、ドルイド
講師 河西瑛里子(本館 助教)

ヨーロッパではキリスト教到来以前の信仰への関心が高まっています。この多神教で自然崇拝的な「ペイガニズム」の実践は多様ですが、イギリスで特に盛んな魔女術、女神運動、ドルイド教を取り上げます。



ドルイドたちの夏至の祝い(2017年)

【お知らせ】
1月のみんなくゼミナールより事前申込制を廃止します。参加希望の方は、当日直接会場へお越しください。また、事前申込制の廃止に伴い、開場時間が13時からとなります。

みんなくウィークエンド・サロン——研究者と話そう

会場 本館展示場(ナビひろば)
※定員なし(ご自由に参加いただけます)
※申込不要、要展示観覧券(一般580円、イベント参加費は不要)

2025年1月26日(日)14時30分～15時
シーア派の殉教語り
話者 黒田賢治(本館 助教)

創設50周年募金(寄附金)のお願い

みんなくへの活動への皆様の温かいご支援、ご協力を心よりお願いいたします。
(受付終了/12月27日(金))



<https://www.r.minpaku.ac.jp/anniversary/donation.html>

友の会 講演会・セミナーへのお申し込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

お問い合わせ先 国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)

電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会講演会

参加形式：会場もしくはオンライン配信
友の会会員：無料
一般(会場参加のみ)：500円
※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第555回 12月7日(土)13時30分～15時
異郷の聖母子たち
——アジアの美術とキリスト教
講師 古沢ゆりあ(本館 機関研究員)
会場 本館2階第5セミナー室(定員70名)
本講演では、アジアのキリスト教美術のうち、近現代、特に20世紀に焦点を当てます。1920年代から宣教師らにより、中国、日本、

東南アジアなど、各地で「現地の様式によるキリスト教美術」の制作が奨励されました。それらは、現地での宣教に用いられたほか、西洋に渡り、博物館や博覧会で展示されました。洋の東西を行き来した聖母子の図像についてお話しします。
第556回
2025年1月11日(土)13時30分～15時
『アイヌ通史』にみる
アイヌ史研究の課題と展望
講師 マーク・ウィンチェスター(本館 助教)
会場 本館2階第5セミナー室(定員70名)
私は英語圏初の本格的なアイヌ近現代史書を日本語に翻訳し、2021年に『アイヌ通史』として刊行しました。原著は、私の大学時

代の師匠が1996年に出版した本です。この本を翻訳した理由の一つは、日本語のアイヌ史研究に見られない論点がたくさん含まれているからです。本講演では、『アイヌ通史』をいかに日本のアイヌ史研究の中に位置づけることができるか、または研究の今後の展望についてお話しします。

会員交流のための企画
中牧理事長の
オンラインサロン
日時 2025年1月19日(日)13時30分～15時
新しい年を迎えたこの機会に、中牧理事長を囲んで、おしゃべりを楽しみませんか?
※会員限定のオンラインイベントです。
(事前申込制)

みんなく創設50周年記念特別展

吟遊詩人の世界
会期 12月10日(火)まで
会場 特別展示館

みんなく創設50周年記念企画展

客家と日本——華僑華人がつむぐ、もつひとつの東アジア関係史
会期 12月3日(火)まで
会場 本館企画展示場

みんなくワールドシネマ
「ペトルーニヤに祝福を」
日時 12月14日(土)13時30分～16時
15分(12時30分受付・開場)
会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)(定員350名)
上映作品 「ペトルーニヤに祝福を」/ God Exists, Her Name is Pertunya(2016年)
司会・解説 菅瀬晶子(本館 准教授)
参加費 要展示観覧券(イベント参加費は不要)
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順
※事前申込の方へ、当日12時30分から本館2階会場前にて展示観覧券を確認後、入場いただきます。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。
【申込期間】
▼一般受付 12月11日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

「つながりを生きる 東京のエチオピア移民」
日時 2025年2月11日(火)祝
14時30分～16時30分(14時開場)
解説 川瀬慈(本館 教授)



「20世紀の証言 モンゴル——工業、牧畜、農業」より

ワークショップ
年末年始イベント
みんなくで巴うつけた!
へびの資料をさがして展示場を巡ってみませんか? アンケートにご協力いただいた方にはオリジナル缶バッジを差し上げます(各日先着120名。
日時 12月22日(日)、2025年1月11日(土)、12日(日)10時～16時30分(15時30分受付終了、配布予定数がなくなり次第終了)
受付場所 本館1階エントランスホール
会場 本館展示場
※当日随時受付、要展示観覧券(イベント参加費は不要)

みんなくミュージアムパートナーズ(MMP)のワークショップ
点字体験ワークショップ
日時 12月14日(土)、2025年1月11日(土)12時～15時30分

休館日のお知らせ
年末年始は12月28日(土)から2025年1月4日(土)まで休館します。年始は1月5日(日)から開館します。

お問い合わせ先
本館研究協力課 共同利用係
K.kouken@minpaku.ac.jp



【申込期間】 12月4日(水)まで
※事前申込制、先着順、参加無料
※オンライン(ライブ配信)でも参加いただけます(定員100名)。
※詳細は二次元コード(QR)からご確認ください。

主催 岩谷洋史(姫路獨協大学 講師) 人間文化研究機構 共創先導プロジェクト(共創促進研究)「学術知デジタルライブラリの構築」国立民族学博物館拠点(X-DPLAS)
永井正勝(人間文化研究機構/本館 特任教授)
人間文化研究機構 共創先導プロジェクト(共創促進研究) 吉村武典(大東文化大学 准教授)
コメント 渡邊三津子(文教大学 准教授) 原隆一(大東文化大学 名誉教授) 趣旨説明 石山俊(本館 プロジェクト研究員)
研究発表 渡邊三津子(文教大学 准教授) 原隆一(大東文化大学 名誉教授) 吉村武典(大東文化大学 准教授)

みんなく
回覧板

イベントの詳細・予約はこちら

みんなくホームページ
催し物のご案内
<https://www.minpaku.ac.jp/event/>



各イベントについて、詳しくはホームページをご覧ください。

「館外開催」
みんなく映像民族誌シアター
本館制作オリジナルDVD「みんなく映像民族誌」シリーズから、2つの収録作品を上映し、監修者によるトークをおこないます。
参加形式
会場参加 第七藝術劇場(大阪・十三)
(各回定員90名)
※館外での開催です。
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順、参加無料
【申込期間】
▼友の会先行受付
12月16日(月)～20日(金) 定員20名
お申し込み先
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
▼一般受付 2025年1月6日(月)～2月5日(水)

司会 黒田賢治(本館 助教)

【申込期間】
▼友の会先行受付
12月16日(月)～20日(金) 定員20名
お申し込み先
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
▼一般受付 2025年1月6日(月)～2月5日(水)

「つながりを生きる 東京のエチオピア移民」より



「最終受付15時」
会場 本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

人間文化研究機構プロジェクト関連 X-DPLASシンポジウム
地域研究アーカイブ画像の活かし方——地理学と歴史学の視点から考える
日時 12月8日(日)13時30分～17時(13時開場)
会場 本館2階第4セミナー室(定員50名)
趣旨説明 石山俊(本館 プロジェクト研究員)
研究発表 渡邊三津子(文教大学 准教授) 原隆一(大東文化大学 名誉教授) 吉村武典(大東文化大学 准教授)

莫高窟220窟壁画「維摩」(模写)

制作 | 正垣雅子

標本番号 | H0328068

地域 | 中国 甘肅省 敦煌市

展示場 | 中国地域の文化展示場



◆ 推しコレポイント ◆

みて！ この重層的な筆致を！ 維摩居士の表情には生気がやどり、古代と現代の時を超えた作家の交流に胸が熱くなる。



紙を巻きあげ、維摩と対峙する画家
(中国 甘肅省 敦煌市、2014年、正垣雅子氏提供)



維摩が洞窟からやってきた！

すえもり かおる
末森 薫

民博 准教授

壁画をはぎとるわけにいかない

みんなくの中国地域の文化展示場に、洞窟の壁に描かれた人物画があらたに仲間入りしたことはご存じだろうか。この画は古代シルクロードの中継地であったオアシス都市・敦煌の近郊にある莫高窟に描かれたものである。髭を蓄え、眼光鋭いその人物は仏教經典に登場する「維摩居士」とよばれる富豪であり、出家はしていないが釈迦の弟子であった。維摩は弁論に優れ、論敵たちを次々ぎゃふんと言わせた。そのため維摩が病気の際、釈迦の弟子たちは畏れて見舞いに行くことを躊躇い、文殊菩薩が代表して見舞いに行くことになった。この画は維摩が文殊菩薩と向き合い、問答している場面である。病気のためか、議論が白熱してか、維摩の表情は険しくもみえるが、その鋭いまなざしにわたしは吸い込まれる。

莫高窟の壁画は、岩の表面につくられた泥壁の上に、さまざまな彩色を施して描かれている。かつては、洞窟の仏教世界に魅了された列強諸国の探検家によって、はぎとられ持ち出された壁画もある。しかし、洞窟と一体化している壁画を、いわず

もがな、物理的にも倫理的にも持ち出すことは許されない。そこで、離れた場所でも壁画と対峙することを可能にしたのが「模写」とよばれる絵画表現である。

紙にやどった維摩の生氣

模写は、画家が作品（壁画）から得られるさまざまな情報を忠実に写しとる地道かつ繊細な作画のプロセスである。画家は作品をさまざまな距離、角度からとらえ、使われた色材や複雑な色味、重ね塗りされた順番などを解釈し、当時の絵師の考えや行動を追体験していく。

この維摩の人物画は京都市立芸術大学の正垣雅子さんが洞窟での調査に基づき「あげ写し」とよばれる模写の方法で描いた作品である。実寸大に打ち出された写真の上に和紙を敷き、幾度も幾度も和紙を巻きあげ画を読みとり、繊細に筆を置いていく。和紙の薄さと柔軟性を活かした技法であり、和紙の上に徐々にオリジナルの画があらわれてくる。

和紙に描かれた維摩はまるで壁に描かれたようであり、その力強さを失っていない。長いときを経たことを伝える亀裂やはがれのリアルさに現地にいるような感覚を覚える。維摩の目線の先にいるはずの文殊菩薩を相手に理路整然と問答をおこなっている様子を想像しながら、洞窟からとび出した壁画を堪能してもらいたい。



莫高窟第220窟の入口。このなかに壁画がある
(中国 甘肅省 敦煌市、2023年)

南アジア展示場のまぼろしのスパイス

まつ お みず ほ
松尾 瑞穂 民博 准教授

健康と癒しの新展示

みんぱくには、九つの地域展示と二つの通文化展示からなる、総面積九〇〇〇平方メートルにおよぶ本館展示がある。初めて訪れて、あまりの広さに驚かれる方もいるだろう。この本館展示は、一九七七年の開館以来、数十年に一度の大改修と、一〇年に一度の展示更新を繰り返し、時代とともにアップデートし続けている。

南アジア展示場は、昨年三月に展示更新を終えた。展示は、まずは研究者が各地で自分たちの研究にかかわる新規資料を収集することから始まる。みんぱくの展示は在籍する研究者たちの研究成果の公開、という位置づけだからである。それゆえ、各研究者の思い入れが色濃く反映されている。わたしは、健康と癒やしにかかわる資料をあらたに展示したくて、アーユルヴェーダ関連資料を収集した。じつは、



上：大規模改修前に展示されていたスパイス類
(南アジア展示場、2014年、企画課撮影)

下：産業技術博物館でのスパイス展示
(インド ペンガルール、2023年)

南アジア展示場にはかつて、南アジア地域の料理や人びとの健康維持に欠かせない多数の薬草やスパイスが展示されていた。それらは長年の時を経て変色し、判別不能となっており、前の大規模改修時に撤去された。が、それをあらたに展示できないか、というのがわたしのひそかな野望であった。そこで、アーユルヴェーダが盛んな南インドの工房を訪れ、関連資料を収集する際に、自然栽培されたオーガニックの薬草やスパイス、ヘナなどの染料も収集してきた。

虫やかビの繁殖が怖い

ところが、収集してきたはいいものの、展示には大きな課題があった。すなわち、植物は色と状態の劣化が免れず、また虫やかビの繁殖の恐れがあり、博物館展示には不向きなのである。食品サンプルのような複製を作り展示するという案も検討されたが、サイズが小さくて種類も形も多様なスパイスをサンプル化するには、技術的にも予算的にも条件が合わず、結局、諦めざるを得なかった。

新しく設けられた「健康と癒やしの探求」セクションでは、薬草染めのヨーガ衣装やアーユルヴェーダ・コスメなど、現代的なアーユルヴェーダの資料が展示されて、それはそれで満足のいくものとなった。だが、名残惜しいのは収蔵庫に保管されたスパイス類である。いつかスパイスの変色を防ぐ新技術が開発されたら、展示する機会もあるかもしれない、と夢想している。



都市でも家庭菜園が盛んで、野菜やスパイスを栽培している(インド プネー、2022年)

中国、変わりゆく村の電気三輪車

かわせ よしたか
川瀬 由高

江戸川大学 准教授

改革開放から約四〇年、かつては自転車
大国とよばれた中国の乗り物事情も大きな
変貌を遂げた。わたしが南京市に滞在して
いた二〇一三年からの三年間でもモーター
ゼーションの波は肌身感じられ、例えば
結婚の準備では新居に加えて新車を用意す
るのが定番となるなど、都市部でも農村部
でも自動車の数は増えつつあった。ただし、
このころの農村部でもっとも普及していた
乗り物は、都市ではほとんど見かけない電
気三輪車であった。

「ヨーガオ(由高)、お前は(車の)免許は持つ
ているか?」「持っているなら大丈夫、簡単
だ。」二〇一四年三月、南京市郊外の村に住
み始めて早々に、わたしは電気三輪車の運
転の仕方をホストファミリーの呂おじさん
に教わった。最高時速は三〇キロ程度で、免
許は不要。鍵で電源をオンにして、ハンドル
をひねると推進し、左右に傾ければ曲がり、

ハンドル部もしくは足元のブ
レーキで停止する。操縦方法
はいたって簡単だ。こうして

わたしは呂家の人びとを町に連れていつた
り、孫娘のお迎えを任されたりするようにな
ったのだった。

当時、都市部では子どもを学校まで送り
迎えする親たちの自家用車やスクーターが
渋滞を引き起こしていると問題視されてい



呂家の電気三輪車。小さなイスを置くと、荷台にも
3〜4人が乗れる(2014年)



新型の電気三輪車。子育て世代と農業引退
者に人気を博しつつある(2015年)
(写真はどちらも中国 南京市)

ことができたからである。日本の農村研究
者の原田津はかつて、農村では生産と生活
は一体であり、農家の自動車は農産物の運
搬車であるとともに家族づれのドライブの
道具にもなると述べていた。中国の農村で
は、人びとの生活Ⅱ生産を支えていたのが、
電気三輪車だったのである。

ところが二〇一五年ごろから、自動車さ
ながらに屋根やドアなどの外装を備えた電
気三輪車が徐々に流行しはじめた。雨風を
防げる密閉式のボディは人を運ぶのには好
都合だが、もはや大きな農具や荷物を積み
込むことはできなくなった。電気三輪車の
トレンドにも、現地で進展しつつあった農
業離れが反映されていた。

たが、農村部の場
合は、「送迎車」の
大部分は電気三輪
車が占めていた。
この車ならば農道
も難なく走れる上
に、高い積載量を
誇る荷台で人や農
具や収穫物を運ぶ

この瞬間に 同じリズム、 同じビートを 共有する



——ダースレイダーさんは現在、ラッパーとしてだけでなく文筆家や映画監督としても活躍されています。ダースレイダーさんにとって表現することはどのようなことですか？

音楽パフォーマンスをすること、文章を書くこと、いろいろなアウトプットがあるけど、じつは全部一緒だと考えています。映画を観たり本を読んだりしてインプットしたものを、自分のなかの思いつき、降りてきたイメージを吐き出して外に送り返す。「やって来るもの」と「吐き出すもの」という循環のなかで中継地点に僕がいて、原稿を前にしたら文章になるし、音楽とともにあるときはライブパフォーマンスになる。

——脳梗塞で倒れたときのことを教えてください。

脳梗塞は三三歳のとき。ある夜、イベントMCの出番前に顔を洗おうとトイレに入ったら、空間がクルッと一回転して立っていられなくなった。すぐにトイレから転がり出たけど、周りのみんなに何かを言ってもまったく伝わらない。なんとか外に出してもらったら、ちょうどゲストが車で到着したタイミングで、その車で近くの総合病院に連れていってもらった。

検査を受けたら「脳梗塞です」と。三半規管へのダメージで、部屋がぐるぐる回って平衡感覚が取れない。三半規管は片方が故障したら、パソ

コンのデータ移行みたいにもう一方に機能が移る。これに三週間かかる。結構驚いたんですけど、移行が一〇〇パーセント完了したタイミングで吐き気が止まりました。リハビリの段階で最初は歩行困難というか。「あれ？ 左足を前におろしてどうやってやるんだ？」って、今までどうやって歩いていたのかわかんなくなっちゃった。歩くことを一から学習し直しました。それで自分を再獲得したというか、もう一度「自分が何者なのか」、「自分がやっていることはなんなのか」をつかみ直すかと思いました。

僕はいル（＝病氣）をレベゼン（＝代表）する存在であり、そして自分のフット（＝地元）は病院であり、自分のホーミー（＝地元の仲間）は病人たちであると再定義した。自分の状況をヒップホップ的に肯定的にとらえている。その考え方を伝えることで、似たような病気を抱えている人たちに力を与えていくことができるんじゃないかな。

——「5 Years」は、誰もがそのような状況になったときに力をもらえる楽曲だと思いました。

僕のなかでヒップホップ的な考え方が身に付いて、ラッパーとしてやるべきことがようやく定まったのが四〇歳。そのあと腎臓の数値が悪くなって、このまま放っておくと五年ぐらいで死んでしまうよって。今振り返れば、だから治療しようと思っ発破をかける意味もあったと思う。そのときは結構ショックがあった



と同時に、五年って言われたけど、よく考えたら明日交通事故に遭う人もいて、僕らっていつでもみんな命あるものは死ぬ。でも死って、何で嫌なんだろうっていうことも。さらに死にちょっとでも近づきそうな病氣も嫌なものだって忌避されている。

死っていうものは常に隣を歩いていて、急に「行くよ」って言って連れて行かれるような、悪い友達みたいな感じで横にいる。死神くんみたいな（笑）。でも周りの人が確かにこいつはそこにいて歩いていたらねってことを継承していけば意味があるんじゃないかな。

——民博客員教授として、どういうことをしていきたいですか？

世界各地のいろんなラッパーに会いに行きたいっていうのもあるし、フィードバックをフィードバックし返すというか、この瞬間に、このビートに、このことが乗っていることって結構すごいよっていう。その感覚をどんどんシェアしていけたらいいと思います。——ぜひ、みんなくをテーマに、即興でラップしていただませんか？

緊迫したインタビューのなかで／みんなくを素材にして土台から築き上げる／同じビートを感じる／リビートされるなかで／どんな印象がやってくるか／イメージは停止されることなく／ブレーキがかかることなく／さっき見てきたニヤウ／ザンビアの奥からやってきた／怪物みたいなものが／退屈な日常に打ち込む／それはまるでヒビのようになっていく／そのつ

まらない日々／ヒビが入ってくる／そのなかに意志が入ってくる／それは石のように硬い／あるいは粘土のように柔らかい／ソフトそしてハード／そしてハードがどくどくとしていくような体験／続々と新しい情報が入っていく／それは怒涛のごとく／さっき図書室で

見てきたいろいろな辞書／それはむかし一九世紀に書かれた本から／いま日本で考えていることが繋がっていく／その先のスケール／それはモンゴルの草原の向こうまで行くみたいさ／突破していきましょう／ヨーロッパのその先／そして一周して回ってきた／再帰的に今／自分のいる場所に帰ってきたときに見えてくる景色は／いかにそれが変わるかどうか／それが逼迫した日常を変えていくためにダースレイダー／みんなくのラップを聴かせています

——（拍手）まさしくダースレイダーさんの想いが吐き出されています。

入ってきたものを吐き出す。入ってくれば出てくるっていう循環構造になっていけば、即興でもそんなに難しくないです。

——「吐き出す」ってある意味暴力的でもあります。ダースレイダーさんは穏やかで、怒りや攻撃性を感じません。

感情の起伏はあると思います。特に家にいるときはいちばん怒っているようです。娘に「また怒ってるでしょ」とか言われるから（笑）。ただ、入ってきたものに対して、自分の感情で加工しないのかな。入ってきた

ものに対して怒りモードで加工して吐き出すと見誤ってしまう。でも、感情自体はあってもいい。怒ってる自分を一步步引いて「ああ、怒ってんな今」と。その怒ってる自分だから今こう思ってるけど、怒ってる自分がこう言ってるってことはこういうことなんだなっていう。

——それはヒップホップの本質的な部分ですか？

そうかもしれない。ヒップホップで自分がやっていることを自分で見る二重性っていうのは大事な気がします。合わせ鏡みたいに無限に自分を見てる自分を見る自分を……みたいな。そのループしていく感じがヒップホップのひとつのあり方で、ループしてるけど同じじゃない。二回目ってのは一回目を聞いたあとの二回目なので、じつは一回目の音を聞いているときと感覚が違う。三回目は一回目と二回目を聞いたあとの三回目を聞いているわけだから。同じ音だけ二回通過して感じる感覚。——地域や言語が変わっても共感できるってそういう部分なんですね。

違う言語でラップしてるけど、共通する感覚があるというのはすごく大事な気がします。

聞き手・編集部



今の推しはツァハラジン

ひさおか か え
久岡 加枝 民博 外来研究員

チーズの入ったパン、ハチャプリは、ジョージア(グルジア)の国民的な食べ物だ。最近では日本でも本格的なものを食べることができるようになった。ジョージアの国民食として世界で有名だが、じつはハチャプリにはさまざまな「仲間」が存在するのだ。今回はそのひとつであり、最近のわたしの推しであるツァハラジンとよばれるパンについて紹介したい。

たいていのパン屋でも売っているハチャプリは、持ち運びに便利なモバイルフード。また、小腹がすいたときに、移動をしながら、あるいは作業をしながら片手ですぐに食べられるファストフードともいえる。最近では、デリバリーサービスを展開するハチャプリ専門店も増えた。

チーズやバターをふんだんに使ったハチャプリは、いささか脂っこく感じられ、胃袋の負担になることも多い。もう若くない筆者は、以前のようにハチャプリが食べられなくなった。そのため最近では、調査の合間にハチャプリ専門店に入っても、その「仲間」を食べることが多い。

ハチャプリには、地方ごとにさまざまなスタイルがあり、黒海沿岸のアチャラでは、卵が入ったものが有名である。肉やジャガイモが入ったパンや、ロビアニとよばれるインゲン豆(グルジア語でロビオ)の煮込みが入ったパンもおなじみである。そのなかでもわたしは、ビーツの葉が入ったツァハラジンとよばれるパンを食べることが多い。

オセチア地方由来のツァハラジン(オセチア語で

「ビーツ(ツァハラ)が入ったもの」を意味する)は、ジョージアでも知られ、グルジア語ではシャハラジンやチャフラキナとよばれることが多い。わたしが調査をおこなってきたムティウレティ地方やプシャヴィ地方をはじめとする東部の山間部の家庭や職場では、昼食と夕食のあいだの軽食としてよく食べられる。店で買ったものや家庭で作ったものがテーブルに並べられ、さまざまな話に花が咲く。

その特徴は、ボルシチ作りに根しか用いないビーツ(鮮やかな赤色をしたカブに似た野菜)の葉の部分が、日本人がダイコンの葉を食べるような感覚で、利用されることである。小麦粉の生地、ビーツの葉とネギ、コリアンダーの葉、チーズとサワークリームを混ぜ合わせた餡^{あん}を包み込む。どこか、信州の野沢菜のおやきのような素朴な味わいであり、ツァハラジンを口にするたびに、遠く離れた日本を思

い出すのは不思議な感覚だ。



左:ハチャプリ専門店のメニューには、さまざまな地方のハチャプリが並ぶ。左上がツァハラジン、右下がアチャラのハチャプリ
右:食べやすくカットしたツァハラジンがこの日の昼食
(写真はどちらもジョージアトビリシ、2022年)

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 山中由里子
編集委員 樫永真佐夫(編集長) 河西瑛里子
黒田賢治 中川理 奈良雅史 松本雄一
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 株式会社 研文社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係
にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

『月刊みんぱく』定期購読

本誌を1年間お届けいたします。年間をとおして、いつからでも始められます。



お問い合わせ

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

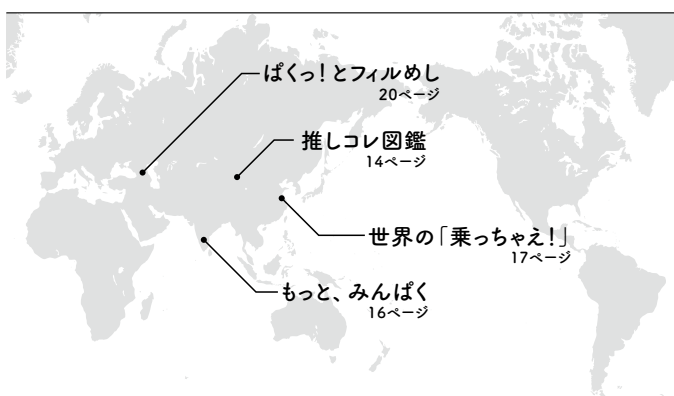
電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会

今月号の地図



編集後記

「ちよいとラップでみんぱくを……」と、ダースレイダーさんにいきなりお願い。カミ対応での即興披露に感動した。耳で楽しみながら、わたしの目は左の眼帯に釘付けになった。そこには、漆黒の眼球からの文字が絶叫、「死に損ない」！生あるものはみな死に損ないという諧謔のメッセージ？あるいは、ことば以前の激情が迸るのを封じる呪文？

呪文は、伊藤亜和さんの「巻頭エッセイ」のテーマに近い。人は呪い呪われ生きていく。ことばはときに人の命を奪うほど強力だ。書字もしかり。しかも、現代のあらゆる制度や約束事とわたしたち

ちの関係からもわかるように、紙によることばの大量複製が近代世界を支えてきたといって過言ではない。だが、ついに時代はペーパーレス化。いっぽうで、技術の進歩が書字以外の紙の有用性をますます広げている。紙はわれわれの身体と精神をじかに刺激するモノとして、まだまだ文明のキー・アイテムなのだろう。(樫永真佐夫)



次号の予告 1月号

特集『「お供え」する人』(仮)



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

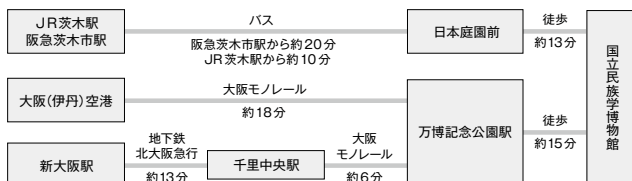
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は直後の平日)
年末年始(12月28日~1月4日)

観覧料 一般 580円/大学生 250円/高校生以下 無料
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

オンラインショップ

「World Wide Bazaar」は おかげさまで25周年!

日頃より国立民族学博物館ミュージアム・ショップをご愛顧いただき、

ありがとうございます。おかげさまで、オンラインショップ

「World Wide Bazaar」は今年で25周年を迎えました。

これからもみなさまにご満足いただけるような品揃えとサービスに

努めてまいりますので何卒よろしくお願い申し上げます。

#みんなくメモリアル プレゼントキャンペーン実施中!

詳しくはX、INSTAGRAMで @MINPAKU_MS をチェック!

※ 12月10日(火)まで。

みんなく友の会会員のみなさまへ、感謝をこめて
WINTER SALEを開催します!

期間: 12月1日(日)~27日(金)

期間中、みんなく友の会のみなさまを対象に、
定価から20%割引きのお得なSALEを開催します。
ぜひこの機会にご来館くださいませ。

※本館ミュージアム・ショップのみ

※一部対象外商品あり



世界のありがとうスタンプ

世界各国の「ありがとう」が
キュートなスタンプに。

合計24種類のことばから
どの「ありがとう」を選びますか?

イラストサイズ: 3cm×1cm
各528円(税込)



お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ(水曜日定休)

E-mail: shop@senri-f.or.jp

オンラインショップ「World Wide Bazaar」

<https://www.senri-f.or.jp/shop/>

